編者序

本書は、これまで欧米の医学・心理学雑誌に掲載された、多重人格障害（解離性同一性障害）の交代人格間に観察される差を扱った、代表的な精神生理学的研究を集めたものである。『私という他人』や『シビル』や『24人のビリー・ミリガン』などの一般書を読んでも、『失われた〈私〉を求めて』などの多少専門的な著書に目を通しても、多重人格障害を持つ人々では、人格の変化に伴なって、表情や声が変わるだけでなく、アレルギーの有無などをはじめ、体質すら変わってしまうらしいことがわかる。もしそれが事実であれば、その機序を解明することは、学問的にはもちろん、治療的にも大きな意味を持つことになる。本書の目的は、人格の交代によって、きわめて短時間のうちに精神生理学的な変化が本当に起こるのかどうかを、読者の方々自身に、主として実験的な研究を通じて検討していただくことにある。そのため、編者による論評は避けた。

本書の読者としては、医学や心理学の専門家が想定されているが、一般の方々にも関心を持っていただけるように、巻末に編者による解説を掲げているので、参照いただければ幸いである。

本書の構成

本書は、多重人格の精神生理学的研究の中心に位置する、フランク・パトナムの論文による「序論」を除き、5部構成になっている。冒頭に収録された、これまでの報告されたこの方面の研究に関する4編の総説論文からなる、第1部「諸研究の総説」をお読みいただければ、この領域の研究の概要がおわかりになるであろう。そのうち、最初の3編は肯定的な観点から、最後の1編が、バランスを取る目的で収められた、少々懐疑的な観点から書かれた論文である。精神生理学的研究を歴史的に俯瞰した論文と催眠との共通点を指摘する論考からなる、次の第2部「歴史および背景」では、この方面の研究に関心を寄せる研究者がかなり昔から存在していたことや、催眠と多重人格障害は深い関係を持っていることがおわかりいただけるはずである。また、精神生理学的研究を含む客観的な実験的研究を収録した第3部「総合的研究」や、脳波、皮膚電気

反応、局所脳血流、自律神経活動を測定した４論文を収めた第４部「精神生理学的研究」をご覧になれば、この分野でどのような実験的研究が現実に行なわれてきたかがおわかりいただけよう。最後に、この方面の研究では特異な位置を占める眼科学的検討を行なった３論文からなる第５部「眼科学的研究」では、それまでの測定や実験によって得られたものよりも一貫性の高いデータの得られていることがご理解いただけるであろう。なお、本書に収録した論文でたびたび言及されるＤＳＭの診断基準を、巻末に参考資料として掲げておいたので参照されたい。

本書が、わが国の多重人格研究の、ひいては心身問題の研究に対して、いささかなりとも刺激になることができれば、編者としてこれにまさる喜びはない。

謝　辞

本書を編集するにあたっては、多くの方々に大変お世話になった。まず、本書のために序文をお寄せくださった、アメリカ国立精神保健研究所・発達的心的外傷部部長フランク・W・パトナム博士に深く感謝したい。翻訳に際し、編者の専門外の精神生理学用語については、30 年来の畏友である、早稲田大学第一文学部心理学教室・石井康智教授と同大学理工学部・安田朝子助手に、局所脳血流を扱った論文については、日本大学医学部脳神経外科学教室・片山容一教授と放送大学教養学部健康科学・仙波純一助教授に、それぞれご教示をたまわった。また、本書に収録した論文の翻訳転載権の取得に当たっては、元エジンバラ大学心理学教授ジョン・ベロフ博士、ヴァージニア大学保健科学センター人格研究室のイアン・スティーヴンソン教授ならびにドーン・E・ハントさん、多重人格の先駆的治療者として著名なラルフ・アリソン博士に一方ならぬお世話になった。この誌面を借りて感謝したい。最後に、各論文を本書に収録するに当たり、転載許可を与えてくださった、著者のフィリップ・M・クーンズ博士、ラリー・V・ペコー博士、レイ・アルドリッジ＝モリス博士、カルロス・S・アルヴァラード博士、パトナム博士、ならびに各原著出版社に深甚なる謝意を表するものである。

1999 年5月 19 日